

足立区議会議員 だ だ 太 郎 様

足立区議会議員 20 番 石毛 かずあき 印

一 般 質 問 通 告 書

今定例会に下記要旨の一般質問を行いたいのので、会議規則第 59 条第 2 項の規定により質問通告書を提出します。

記

行 政 区 分	質 問 の 要 旨
1 政策経営行政	1. 孤独・孤立・ひきこもり支援について 国の調査によると、中高年や若者の多くが、孤独・孤立を感じている。孤独や孤立は犯罪や自殺、健康上のリスクを高めるとともに、孤立死なども深刻な社会全体の問題となっている。国は 2024 年 4 月に「孤独・孤立対策推進法」を施行し年齢や性別にかかわらず、これまで以上に「孤立・孤独に関する正しい知識を広げるとともに支援することが何より重要」としている。高齢者について区は地域の協力のもと「孤立ゼロプロジェクト」を推進し、孤独や孤立状態にある人を支える取り組みを行っているが更なる対策が必要である。 「若者への支援」について ① 経済的に厳しい状況に置かれた若者などが望まない孤独・孤立に陥りやすく、生きづらさを感じていることが多いと聞く。現在、孤独・孤立は心身に大きな影響を与え、社会に分断をもたらすという認識が広がり、国の推進法の理念には、その状態となることへの予防や迅速かつ適切な支援、その状態から脱却することに資する取り組みとしており、孤独・孤立は社会全体の課題であるとしている。「自由な意思の尊重」と「孤独・孤立の肯定」は別のテーマであり、問題を放置せず、不平等を見過ごさない温かい社会に繋げるためにも、広報誌や HP 等で特集を組むなどし、意識啓発に努める取り組みが必要と思うが伺う。 ② 豊島区内にある NPO 法人では若者向けのシェアハウスや就業体験、インターネットでの相談などの活動を行いながら、週 3 回、水・木・土曜日の午後と第 2・4 金曜日の深夜に場所を開放している。食事を用意し、利用料は無料で対象は 15～25 歳前後である。当区としても NPO などと連携しながら、精神的・身体的虐待や貧困に悩み、家庭が安全な
	2 月 1 4 日 午前・午後 9 時 1 5 分受付 質問時間 20 分

行政区分

質問の要旨

場所ではない若者、中学・高校を卒業後、社会になじめず周囲の大人に頼れない若者が利用できる居場所づくりを推進してはどうか伺う。

- ③ 昨年、東京藝術大学が中心となり、京都大学やヤマハなど産官学 41 機関が連携し「望まない孤独や社会的孤立」を乗り越えるための「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」となるプラットフォームを立ち上げた。「アートを介して多様な人々と社会とを繋げ、孤独・孤立の解決に取り組み心の豊かさのある社会を創造する」というテーマを掲げ若者にも受け入れやすいイベントを実施している。現在、多くの美術館や博物館では「対話型美術鑑賞プログラム」を導入している。「対話型美術鑑賞プログラム」とは、美術作品を見て自分なりの素直な感じ方を参加者同士で話し合うプログラムで、普段発語が少ない人が対話を楽しむ傾向が確認されており、また、BPSD（認知症の行動や心理症状の緩和）にも効果が認められている。当区においても東京藝術大学等から協力を得ながら、知的障害や心の病などの若者支援として心から楽しめるような「対話型美術鑑賞プログラム」の導入を図るべきと思うが伺う。

- ④ ひきこもりの本人と家族や友人、精神科医や臨床心理士、看護師などが一か所に集まり行われる「開かれた対話」オープンダイアログの有益な効果が注目され、中でも同じような経験をした人たちとの対話も重要である。本人の問題意識の乏しさや家族関係のトラブルなど、共通した課題を含んでいることから、依存症の治療に用いるグループセラピーのようなスタイルで行うこともある。区の支援の中でオープンダイアログに取り組み、その効果などを周知すべきと思うが伺う。

「女性の孤立リスク対策」について

- ① 高齢者のうつ病は加齢による脳の変化に心理的・社会的孤立が加わり、変化への適応が困難になることで発症するといわれる。特に女性の高齢者は家族や友人を失ってしまうなどの喪失体験や加齢による体調の変化、経済面の不安からストレスを受けやすいと聞く。現在、区は各地域で心の健康相談会を行っているが、女性向けに特化した相談会を積極的に開催すべきと思うがどうか。

また、気軽に心の健康相談ができるようオンライン相談やアンケート方式などを取り入れ、必要と判断した時には関係機関と連携を取り、スムーズに専門医へと促すことができるようにすべきと思うが、併せて伺う。

- ② 山形市では LINE を活用し、同市内の在住者、通勤・通学者の孤独・孤立の悩み相談に応じる「つながりよりそいチャット」の提供を始めた。これは、傾聴型生成 AI（人工知能）と、社会福祉士や精神保健福祉士、

	20 番 石毛 かずあき
行政区分	質問の要旨
3 福祉行政	臨床心理士などの資格者と実務経験を持つ専門職の相談員がチャット形式で悩みに対応するのが特徴で、NPO 法人フローレンスの協力を得て取り組んでいると聞く。AI と専門職員のハイブリッド方式で孤独・孤立の悩みに向き合う取り組みは全国でも珍しく、相談したい相手は AI か相談員かを選ぶことができ、本人の希望や相談内容によっては相談員と山形市が情報を共有し、関係機関と連携し支援につなげている。このような女性をはじめ、誰もが相談しやすい取り組みを区としても行うべきと思うが伺う。 「健康寿命の延伸と地域社会で支えるソーシャルキャピタル」について 今年は団塊の世代が 75 歳以上となり、総人口の約5人に1人が後期高齢者となる。高齢になっても元気で生き生きと日常生活が送れる健康寿命の延伸に力を入れる取り組みが重要である。公明党は昨年、社会保障を中心とする「日本の将来像 2040 ビジョン」の中間取りまとめを発表し、健康寿命の延伸に向けて、地域の特性に合わせた介護予防戦略を掲げ、高齢者の社会参加を促す環境整備や「住んでいるだけで健康になれる街づくりを進める」としており、区がおこなってきた取り組みに合致する。 ① 高齢者の社会参加で注目される取り組みに、集いやすい場を確保して、体操やお茶会などの多彩な活動を地域住民が主体となって定期的に行う、地域の「通いの場」の整備がある。区は、地域の住民同士が気軽に集い、一緒に活動内容を企画し、ふれあいを通して「生きがいくくり」「仲間づくり」の輪を広げる場所であり、地域の介護予防の拠点となる場所でもある「通いの場」を今後も継続的に取り組めるよう支援すべきと思うが伺う。 ② 歩きたくなる街づくりは、意識しなくても自然と健康に良い行動をとることにつながるといわれている。区民の意識の高まりに合わせて、社会の環境改善を積み重ね、地域を挙げた総合力で健康寿命を延ばしていくべきと考える。住んでいるだけで自ずと健康になるまちづくりの視点から取り組まれてきている江北エリアデザインは、からだもこころも健康になるまちづくりとして、自ずと歩きたくなるという健康行動のつながりが大切であると考え。これまでの区の現状と課題、今後の取り組みについて伺う。 ③ 昨年、ハーバード大学公衆衛生大学院イチロー・カワチ教授が来日し、11 月に足立区と東京科学大学が開催した講演会において、人とのつながりが健康に良い影響を与えるという、ソーシャルキャピタルについ

	20 番 石毛 かずあき
行政区分	質問の要旨
	て講演した。その中で、近所同士で助け合う土壌、そうした地域のつながりや信頼感をもとに、人を思いやる協調的な行動をとり、それが自分自身と地域全体の財産になることであり、それが高い地域では、健康に良い情報がより早く伝達され、助け合いや精神的なサポートなどを得ることができ、健康が促進されるとのことである。ソーシャルキャピタルは現在、様々な分野で重要視されているが、当区は健康寿命の延伸を目指している中で、特に衛生行政においては、これまでどのような取り組みを行ってきたのか伺う。 また、多様な人を「橋渡し」することでソーシャルキャピタルを高める取り組みが益々重要になると考える。今後区の衛生行政では、どのような事業で強化していくのか、併せて伺う。 ④ 地域や人、信頼感を醸成する場として、最近ではシニアの新たな居場所として「シニア食堂」に注目が集まっている。ここでは一緒に調理したり、誰かに作ってもらって食べたりと形態は様々である。都は地域で高齢者の交流を増やそうと「TOKYO長寿ふれあい食堂推進事業」として上限 56 万円を支給している。2024 年度は、文京区など4区1町 18 食堂へ支援がはじまっている。当区も取り組んではどうか伺う。 ⑤ シニア食堂や高齢者の孤独を防ぐ活動をする現場の課題のひとつは男性の参加者が少ないことにある。男性が「これなら参加してもいい」と思えるテーマに設定するなど、新たな高齢男性の集まりを増やす取り組みも必要と考える。例えば趣味のイベントや、世田谷区の社会福祉協議会が支援する「おとこの台所」のように、一緒に料理をして食事をするなど、居場所づくりを区としても取り組んではどうか伺う。 ⑥ 地域や人とのつながりの創出は、高齢者層に限った話ではない。令和 6 年 10 月現在で区にはこども食堂が 46 箇所あり、区民が自発的に居場所づくりを行っている。最近では、子どもだけでなく「みんなの居場所」であることを掲げているこども食堂も増えつつあり、そうしたところでは、子どもか大人といった明確な境界はない。こども中心の考え方はありつつも、そこに携わる大人が交流を通じて、自らが元気をもらっていると聞いており「みんなまんなか」の居場所として運営しているところもある。こども食堂が「みんなの居場所」としての機能を有していけるように、区として支援すべきと思うが伺う。 ⑦ こども食堂は共に助け合う「共助」に関する取り組みではあるが、区の支援を投じることは、居場所づくりの自由な発想に一定の制約が生じてしまい、共助の自由な発想がとりづらくなる。そうしたことにならないよう区は、運営補助といった資金支援だけではなく、運営団体を区が認証するなど、区の信用力を生かした後方支援に取り組む必要があると考え

	20 番 石毛 かずあき
行政区分	質問の要旨
4 都市建設行政	る。区も支援しているという信用力が増し、民間から継続した資金や物品の支援を受けやすくするべきと思うが区の見解を伺う。 ⑧ 高齢の単身者で頼れる家族が近くにいない人、特に要介護3以上の認知症も伴う人の場合は、家賃や介護保険、入院の契約時に保証人がいないとサービスが使いにくいいため、ケアマネジャーや施設職員が事実上のサポートを行っているが、身元保証人を担う民間事業者に委ねるケースもある。そのため、身寄りのない高齢者と身元保証や、死後の事務サービスを担う事業者とのトラブルが問題となっている。トラブルを防ぐためにも、国が策定した「高齢者等終身サポート事業者ガイドライン」を事業者だけでなく区民にも広く周知・徹底する取り組みをすべきと思うが伺う。 2. 南西地域における荒川・隅田川沿川のまちづくりについて 新たな足立区基本計画は「足立区基本構想」における将来像として「協創力でつくる 活力にあふれ 進化し続ける ひと・まち 足立」の実現に向け、4 つの視点と 7 つの柱で構成されており、そのひとつとして「地域の個性を活かした都市基盤が整備されたまち」をあげている。荒川、隅田川沿川についても個性を生かした様々な施策が展開され、便利で快適な「住みたくなる」「訪れたくなる」街の実現が期待されている。 ① 昨年、荒川放水路通水 100 周年となり、今後は更なる河川空間の魅力を生かし、親しみやすい環境作りが重要である。毎年 9 月に実施している「あだち自然体験デー」では、近年の酷暑により来場者や運営スタッフに負担がかかっているという声も聞く。開催日の見直しを図るべきと思うがどうか。 また、企画内容や地元の新田商店会と連携しながら、充実した内容に見直すべきと思うが、併せて伺う。 ② 隅田川テラスは都の管轄だが、かねてより特に夜間の治安向上のため、照明設置が必要と要望してきた。今後の見通しを伺う。 ③ 気軽に楽しめるスポーツとして広がりを見せているのがアーバンスポーツである。オリンピック競技として注目され、競技人口が増加中のスケートボードや BMX、スポーツクライミング、最近では、体全体で走る・跳ぶ・登るなどの移動動作で町や森の障害物を越えるパルクールが、幅広い年齢層で楽しまれている。アーバンスポーツは、広く大がかりな施設を

	20 番 石毛 かずあき
行政区分	質問の要旨
	必要とせず、街中の小スペースでも始められる。また、順位を争うことよりも、自らが楽しみ仲間や観る人たちも一体となって楽しむことが優先される。宮城ファミリー公園や宮城ゆうゆう公園の魅力を高めるため、アーバンスポーツが楽しめる整備を行ってはどうか。 また、荒川左岸の扇地区を含めた沿川の公園については、計画的にインクルーシブ遊具の設置を進めるべきだが、併せて伺う。 ④ 荒川や隅田川沿いの工場の跡地や空地に新築マンションや住宅が増えてきているが、整然とした街並みを求める声もある。周辺住民の生活環境の保全を図りながら、住環境と調和した生活者に優しいまちづくりを地域の声を聞きながら推進すべきと思うが伺う。 ⑤ 災害時における自助・共助をはじめ高齢者や子育て支援などを充実するためには、地域や地区で支え合う地域力を高めることが重要であるとする。沿川エリアの町会、自治会の加入率はばらつきがあると思うが、加入率が低い地域における課題と区としての今後の取り組みについてはどうか。 また、新田地区や千住大橋駅周辺の地区の大規模集合住宅などの居住者や新たな住宅の建設後は、町会、自治会への結成や既存の地域のつながりを深めるためにも、加入促進に向けた取り組みを推進すべきと思うが、併せて伺う。 ⑥ 安全・安心なまちづくりのためには、地域による見守り、清掃、美化、防犯パトロール、公園の自主管理、小学校での「わが地域を知る学習」や、中学校でもそれぞれ工夫して取り組みを行い、地域自らまちを守り・育むなどの意識啓発を推進すべきと思うが伺う。 ⑦ 日暮里・舎人ライナー足立小台駅西側の民間企業の跡地は現在、スーパー堤防事業が行われ、完成後は水害リスクが大幅に減少すると期待されるが、事業に遅れがあり周辺地域の住民からは不安で心配する声もある。特に、2025 年 12 月には国と都が連携して進める隅田川側の工事に伴い、歩道の通行止めと通学路の迂回が予定されている。地域交通と通学路の安全確保等、その都度の現状と今後のスケジュールを丁寧に周知すべきと思うがどうか。 また、補助 118 号線上部の空間について、地域より日常的に使用可能にしてほしいとの声もある。早期に整備すべきと思うがどうか。 さらに、足立小台駅東側のロータリー広場には照明設備はあるものの一部の設備しか点灯しておらず、夜間は暗く危険との声がある。早急に対応すべきだが、併せて伺う。